

女性作家という枠組み―田村俊子

荻原 桂子

九州女子大学人間科学部人間発達学科人間基礎学専攻
北九州市八幡西区自由ヶ丘一・二（〒八〇七―八五八六）

（二〇一九年十月三十日受付、二〇一九年十二月十八日受理）

はじめに

フェミニズム運動の成果の一つとして、女性学がアカデミズムの中で地歩を固め、男性中心の視点によって研究が行われてきた哲学、社会学、心理学、歴史学、政治学、文学などを女性の視点からとらえ直す女性学という学問領域の研究が活発になってきた。さまざまな学問分野を女性の視点からとらえ直し、男性視点の偏りを正そうとするものである。現在の女性がおかれている現状は、一世紀前の『青鞥』に参加した「新しい女たち」の闘いによって得た既存の地位や権利のうえに成り立っている。そこには、与謝野晶子、平塚らいてう、長沼智恵子、神近市子、伊藤野枝といった数多の「新しい女たち」による苦闘があった。

一九一一年九月、日本ではじめて女性の覚醒をうたった雑誌『青鞥』が平塚らいてうによって創刊された。『青鞥』には、全国各地から集まった個性豊かな女性たちが登場する。彼女たちは封建的家族制度や良妻賢母偶像崇拜と闘い、さまざまな論争を巻き起こした。ノルウエーの劇作家イブセンの『人形の家』が同時期に坪内逍遙の文芸協会によって上演され、『青鞥』では「付録ノラ」として特集した。「和製ノラ」と呼ばれた『青鞥』の時代を生きた女性たちの声は、現代に生きる女性たちの直面する問題とむすびつけてとらえることができる。

「新しい女」「ノライズム」などの言葉が流行するなかで、松井須磨子が「人形の家」に出演しノラで大成功をおさめるなか、女優として舞台上に立ったこともある田村俊子は、青鞥社の創立にあたり賛助員に加わり、機関誌『青鞥』創刊号に「生血」を発表した。

一、田村俊子

田村俊子（一八八四年四月二五日―一九四五年四月一六日）は本名佐藤とし、別筆名に佐藤露英、佐藤俊子などがある。東京府東京市浅草区蔵前町（現在の東京都台東区蔵前）に生れ、東京府立第一高等女学校卒業、日本女子大学校国文科を中退している。代表作には『木乃伊の口紅』、『炮烙の刑』などがある。官能的な退廃美の世界を描き、人気を得た。代々続く札差だったという米穀商の家に生まれ作家を志し、幸田露伴の門下に入る。一九〇二年に露伴から与えられた露英の名で、小説『露分衣』を発表するも、露伴から離れ、岡本綺堂らの文士劇に参加したことをきっかけに女優になる。だが文学への意欲は失われず、一九〇九年に事実婚した田村松魚の勧めで書いた『あきらめ』が、一九一一年大阪朝日新聞懸賞小説一等になり賞金一千元を得た。この作品は、同紙に一月から三月まで連載された。その後、『青鞥』、『中央公論』、『新潮』に次々と小説を発表し人気作家となる。田村松魚は無収入になり妻俊子に寄生していた。一九一三年一月「遊女」（後改題して「女作者」）を『新潮』に発表、四月『木乃伊の口紅』を『中央公論』に発表する。これより田村俊子の筆名を使用する。一九一四年四月『炮烙の刑』を『中央公論』に発表、女性作家の第一人者として文壇に全盛を誇る。しかし、一九一八年に朝日新聞記者鈴木悦の後を追ひ、松魚と別れバンクーバーへ移住、悦とともに現地の邦字紙『大陸日報』の編集に参画する。一九三六年、悦の死により一八年ぶりに帰国して日本で小説家としての活動を再開したが、かつての筆力はなく佐多稲子の夫である窪川鶴次郎との情事が発覚する。その経験を基に書いた小説『山道』を発表後、日本を離れ上海に渡り、中国語婦人雑誌『女

声』を主宰することになった。一九四五年四月一日、友人の中国人作家陶晶孫の家から人力車で帰宅途中に昏倒し、搬送された上海の病院で四月六日、脳溢血により客死した。享年六二歳。墓所は鎌倉の東慶寺にある。没後、田村俊子賞が創設された。

二、「女作者」

「女作者」は、最初「遊女」と題されて、一九一三年（大正二）一月一日、『新潮』第一八巻第一号に田村とし子の筆名で掲載された。新年号は女性作家特集で、他に尾島菊子、嵯峨秋子、水野仙子らが寄稿している。黒澤亜里子は、同時代評には「田村とし子氏の『遊女』はほんとうに面白かった。感覚が文芸の上に重要な地位を占めるやうになつた今、此種の女流作家がどしく、出なければならぬ」（ABC『新年の小説を読み手』『新潮』大正二年二月）、「都会人の生んだ純粹の都会芸術である。人間の感覚がどの程度まで洗練され発達して行くものかと云ふことを、俊子女史の芸術は示して居る」（六白星『俊子女史の近作業』『誓言』、『読売新聞』大正二年七月二〇日）、千葉亀雄「一月文壇の概評」（『文章世界』大正二年二月）等がある」と解題している。後に題名を「女作者」と改め、『誓言』（新潮社、一九一三年五月一日）に収録された。「この作者はいつも白粉をつけている」というように、女作者と白粉は同義語となつてゐる。

どうしても書かなければならないものが、どうしても書けないくくと云ふ焦れた日にも、この女作者はお粧りをしている。また、鏡臺の前に座つておしろいを溶いている時に限つて、きつと何かしら面白い事を思ひ付くのが癖になつてゐるからなのでもあつた。おしろいが水に溶けて冷たく指の端に觸れる時、何かしら新しい心の觸れをこの女作者は感じる事が出来る。さうしてそのおしろいを顔に刷いてゐる内に、だんくんと想が編まれてくる——こんな事が能くあるのであつた。この女の書くものは大概おしろいの中から生まれてくるのである。だからいつも白粉の臭みが付いてゐる。

この化粧の行為について、長谷川啓は「実は俊子はきわめて早い時代から、これまで述べてきたジェンダー表現とともに、女のセクシュアリティの表現にも着眼してきた数少ない作家の一人であり、同時代の与謝野晶子が短歌の世界で表現していることを、小説の領域でこころみている。俊子の性や官能の表現は、江戸末期の文化・情緒の退廃を引きずりつつも、まさしく女のエロスの解放という女性解放意識と結びついたものであつた。したがって女性解放意識そのものから噴出した〈男女両性の相克〉問題は、俊子の場合、官能的側面と分かちがたく結びついていて、彼女の文学の特徴と魅力はこの点にこそある」と指摘している。俊子の作家としての活躍は、青鞥による女性解放の運動と同時期に絶頂を迎えている。女性解放の意識は、俊子の文業のあらゆる分野で発揮されている。

「女作者」は、女性がものを書くことの実体そのものを描いている。白粉は、他者に対して施された化粧ではなく、女性という性を解放する装置なのである。俊子は、白粉を纏うことで性を離れた「女作者」になることができる。

この女作者はいつも白粉をつけている。（中略）おしろいを塗けずにある時は、何とも云へない醜いむきだしな物を身體の外側に引つけられてゐるやうで、それが氣になるばかりぢやなく、自然と放縦な血と肉の暖みに自分の心を甘へさせてゐるやうな空解けた心持になれないのが苦しくつて堪らないからなのであつた。さうしておしろいを塗けずにある時は、感情が妙にぎざ／＼して、「へん」とか「へつ」とか云ふやうな眼づかひや心づかひを絶えず為てゐるやうな僻んだいやな氣分になる。媚を失つた不貞腐れた加減になつてくる。それがこの女には何よりも恐ろしいのであつた。だから自分の素顔をいつも白粉でかくしてゐるのである。

白粉は、ものを書く女が日常においても絶えず身に纏うことができる唯一の戦闘服なのである。俊子は化粧を施すことで、当時タブー視されていた女性の性の表現を、男性目線による歪曲なしに描くことができるようになった。

同時代評として、森田草平は「人生に對し、世間に對して、こだはらないうづぬけたところのある觀察眼を持つて居る人」⁴と述べ、徳田秋聲は「感覚的に生きてゐた女といふよりも、寧ろ意志の生活をしてゐた人のやうに思へる」⁵と述べていることから、二人の男性作家は作品についてよりも「新しい女」としての俊子のセクシャリティについて評している。

駒尺喜美は俊子を「ひきさかれた性であることを描いた作家」と捉え「女が男と対等の自我を主張し、対等に張り合っていることが、露骨に描かれている」ことから正当な評価を受けてこなかったことを指摘している⁶。

女作者は低い聲で然う云ひながら、自分の亭主の襟先を掴むと今度は後ろの方へ引き付した。

「裸體になつちまへ。裸體になつちまへ。」

と云ひながら、羽織も着物も力いっぱい引き剥がそうとした。その手を亭主に押し除けると、女作者はまた男の脣のなかに手を入れて引き裂くやうにその脣を引つ張つたりした。口中の濡れたぬくもりがその指先にごつと傳はつたとき、この女作者の頭のうちに、自分の身も肉もこの亭主の小指の先に揉み解される瞬間のある閃きがついと走つた。と思ふと、女作者は物を掴み挫ぐやうな力でききなり亭主の頬を抓つた。

初出時の作品のタイトルが「遊女」であつたことから、「女作者」は、作家である前に肉体としてのセクシャリティが強調されている。小平麻衣子は、フェミニズムにとつて、精神的・肉体的両面にわたる自立は、守られなければならぬとしたうえで「女ということばや概念は、それ単独ではなく、男との対比的な関係性の中で定義が生じてくるものだからである」⁷と指摘している。あらゆる分野において、男性優位の時代にあつて樋口一葉が実現できなかった、ものを書く女の自立を俊子は実現することができた。女性が自らの性を自らの言葉を用いて描くという人間本来の面目が「女作者」にはあるといえる。

三、女性作家という枠組み

オースティンは「それぞれの文を述べる（もちろん適当な状況のもとにおいて）ことは、私がかくかく述べている際に私が行うと述べているその当のことを実際行っているという私の行為を記述することではなく、また、その当の行為を私が行っているということを陳述しているのではないということとは明白なことであらう」⁸と述べている。

笹川洋子は「お話を聞かせて」という発話は「Ohanashi wo kikasete」という音声を発する行為（発語行為）、その発話によつてどのような行為を行うか、この場合は依頼という行為（発話内行為）、その発話の相手への影響（発話媒介行為）に分けられる。発話媒介行為からみると、「お話を聞かせて」という発話は、子どもから母親、恋人どうしの場合は相手を嬉しがらせ、刑事から少年や少女への発話という状況では相手を怯えさせるかもしれない。発話媒体行為は、あらかじめ意図された場合は、察しや予測できない発話効果として現れる⁹。と物語行為について述べている。自然言語のことばと違って、文学のことばには、読み手が語り手の心のなかに入っていくことができるという効用がある。語り手の視座を明らかにすることによつて、ジェンダーの問題を顕在化することができるというのである。

言葉への積極的な関わりが、作品に対する読者の能動的創造性を生み出す。田村俊子が生きた時代は、女性の発話行為は、男性の発話行為に比してバイヤスがかかつていた。人間はことばを使う動物であり、ことばを使つてつながり合うことで社会を形成する。ことばは、人間が社会や文化を創造する源である。近年の社会言語学では言語は社会を映していると考えるのではなく、言語が社会を作り出す働きに注目している。言語は「当たり前のこと・常識・知識」を作り出すのに重要な役割を果たしているからである。

人間の性に関して私たちが当たり前だと信じていることは、言語によつて語られることで常識になった。ことばが「性」の常識を作りあげ、ことばでジェンダーを表現しているとしたら、今ある「性」の常識を変えることができるのも言語だということになる。言語とジェンダーの関わりについて意識することは、性をめぐる社会の仕組みや社会における自分自身の役割を理解するだけでなく、よりよい社会を実現することにつながる。

日常使われることばと違って、文学作品の「女性によることば」と「男性によることば」は意識的に使い分けられている。文章を読む側に無意識のジェンダー意識が働き、不自然なことばを不自然と思わず受け入れていくことがある。文学のことばによって女性性・男性性を規定している。性によって言葉づかいを区別し、マークすることは豊かなことばなのだろうか。社会が女性に求める役割意識等が顕著に反映していることが国語辞典のなかにもたくさんある。「養う」「抱える」などには、「妻」「子ども」という目的語が文例として挙げられている。このような問題が問題として意識されるには気づきが必要である。

ことばが「性」の常識を作りあげているとしたら、言語とジェンダーの関わりについて考えることは、性をめぐる社会の仕組みや、社会における自身を理解すると同時に、社会の矛盾や歪みを改めることにつながる。

翻訳者が持っている知識としての女ことばが、翻訳の過程に影響を与えるため、翻訳のことばは、不自然な「女ことば」になる。原語では、同じことばなのに、女性が話しているといふ女ことばに訳してしまう。それは、「このような話し方が女ことばだ」という知識からおこる。知識だから、女性に限らず誰でも特定の女性像を作りあげるときに、女ことばを資源として利用するのである。

社会通念だからこそ、誰でもオールマイティーな女性像を作りあげるときに、女ことばを便利な道具として利用するのである。翻訳では、登場人物が女性であるときは「わね」「わ」「の」といった女性文末詞が常識的な表現になっていることがわかる。翻訳でなくとも「よ」は女性文末詞として若い女性の台詞に使用されている。

オースティンは、言語とともに発語者は行為を行っているという考えから言語行為について次のように指摘している¹⁰。

発語行為とは、大よそ、一定の意味 (sense) と言及対象とを伴って一定の文を発することに等しく、また、この両者は、大よそ、伝統的な意味における意味 (meaning) に等しいものであった。第二に、このとき同時にわれわれは、情報伝達、命令、警告、受領等の発語内行為、

すなわち、一定の(慣習的な)発言の力をもつ発語を遂行しているのであるということも述べた。第三に、このときわれわれは、同時にまた発語媒介行為をも遂行するのである。すなわち、何かを言うことによって、説得、勧誘、阻害、さらには、驚かせたり誤らせたりすることなどを惹き起し、なし遂げることである。

オースティンは、言語は行為であり、読者が解釈によって物語を生み出すという言語媒介行為について述べている。自然行為のことばと違って、文学のことばは読み手が語り手の視座を明らかにすることによって、ジェンダー問題を顕著化することができる。飯田祐子は「女性作家の自己表象から浮かび上がってくるのは、自己を指示対象として表象する行為でありながら、指示対象となっている自己に向かうのではなく、読み手という他者に向かうという自己表象行為のあり様である」¹¹と指摘している。俊子によって開かれた女性の性の表現は、行為としての読者の女性の性への開眼に向けて働きかけていたのである。

おわりに

ジェンダーという概念には、文学・文化研究の中に組み込まれ、ジェンダー以外のさまざまな差異との関係性をふまえたジェンダーが複合的に機能する様態がとらえられている。女性作家の(女性)という記号も文化的なカテゴリーとして文学表現で機能してきた。田村俊子は一九三八年に上海に渡り、一九四二年五月一日中国語雑誌『女声』を主宰創刊した。俊子客死後の七月一日まで発行された『女声』の言語空間には、多くの日本文学研究者及び中国日文学者が組み込まれている。中国人の女性作家張愛玲は太平洋戦争勃発のため、香港陥落後一九四二年上海に戻り旺盛な文学活動を展開する。同時期上海で発行されたいた邦字紙『大陸新報』には、田村俊子と久保田万次郎の対談が掲載され、張愛玲の作品「燼余録」が日本人室伏クララの翻訳で掲載されている。緊迫した国際情勢を背景に展開した言語行為を探ること、戦時上海における『女声』をめぐる言語空間におけるジェンダー・システムの可変性が浮かび上がってくる。

阿部知二が「花影」（『文学界』一九四九年六月）という戦時上海の交友を追想した作品に「年老いた日本の女流作家」「もう十年も前から北京上海にすまつてゐる孤独な人」と描いたのは、田村松魚と離婚後の佐藤俊子である。俊子は一九四四年の南京での「第三回大東亜文学者会議」に阿部と共に上海から参加した。俊子は、中央公論社の特派員として一九三八年一月に中国に来ていた。一二月の滞在予定であったが、日本文壇を窮屈に感じていた俊子は、そのままずると北京での生活を続ける。南京国民政府の顧問だった草野心平は、中国人女性のために文化的雑誌の刊行を考えていた俊子に大平出版印刷公司の名取洋之助を紹介する。

中国語雑誌『女声』は大平出版印刷公司の編集室をかり、陸軍報道部の配慮で用紙を融通されて発行することになる。俊子は中国服を身につけ、中国名の左俊芝として中国文化に根ざした、女性のための月刊誌を発行した。俊子の中国人及び中国文化に対する愛情は『女声』という中国語雑誌の隅々まで浸透している。戦時上海で中国人女性のために日本人女性が取り組んだ女性表象をめぐる言語行為の意味は深い。そこには、『女声』をめぐる言語空間に引きつけられた日中のさまざまな文学表現者の言語行為の実体がある。

俊子の『女声』が創刊された一九四二年に草野は一時帰国している。一月に「第一回大東亜文学者会議」が東京で開催されることになり、草野は華民国を代表として来日した。東洋の民族が一致団結して大東亜戦争を勝ち抜くための大東亜精神の樹立及びその強化普及が大会の目的であった。理想を高く掲げたこの大会は表向き大成功であった。第二回大会は一九四三年八月東京で、第三回大会は一九四四年一月南京で開催され、第四回は新京に内定していたが、日本の敗戦が報じられ草野は家族とともに南京日僑集中營に収容された。

たとえば、中国語雑誌『女声』に掲載された宮沢賢治「注文の多い料理店」は、当時の日本占領下の上海という文脈で読めば、二人の猟師は明らかに日本軍のメタファーとして浮かび上がってくるというように、翻訳という言語行為は、外国語というフィルターによって時代、社会、歴史を組み替えることができる。雑誌主宰者である俊子のねらいは、外国語というフィルターによって言語空間すなわち作品世界を変換させることに最後の文学的情熱を注

いでいたのではないか。ジェンダーによる言語行為という視点から、『大陸新報』（一九四四年二月一日）に連載した俊子の「日華の演劇に就いて」（久保田万太郎との対談や同年六月二〇日掲載した若江得行のエッセー「愛愛玲記」は重要である。俊子という女性作家が放った時代に抗う表現者のメッセージを、ジェンダー・文学・メディアという視点から考えることで、不明な部分が多い近代東アジアにおける女性表象を解明することができる。日中文化交流において、ジェンダー表象を日本語ではなく中国語で発信しようとした俊子の目論見は成功した。

俊子主宰『女声』と大東亜文学者大会とのつながりから『女声』の言語空間が占める複雑な背景が浮かび上がってくる。大東亜文学者大会に郭沫若、老舍、林語堂といった大物作家の参加が実現できなかったことは、戦時下の日中関係の難しさを語っている。『女声』には共産党地下工作員である閔露をはじめ、丁景唐が率いた上海地下工作員や進歩青年もおり、周作人や柳雨生といった中国人作家の寄稿もあった。日本人作家俊子の主宰する中国語雑誌『女声』には不思議な吸引力が働いていた。

『田村俊子』を上梓した瀬戸内寂聴は、俊子には中国文化協会の武田泰淳や堀田善衛をはじめ、上海に渡っていた阿部知二や石上玄一郎などとの交流があったことを指摘している¹²。なかでも武田泰淳は『女声』で中国語翻訳を担っていた陳緑妮をモデルとした人物を作品に登場させるなど日本人作家の作品が中国語雑誌『女声』をめぐる複雑に関係していたことがわかる。田村俊子は死の直前まで白粉をつけていた。日本、カナダ、アメリカ、中国とまさに世界を舞台に女性を演じきった一生であった。女性の肉体の解放だけではなく、女性の精神の解放を強く望み、女性の声をひろく世界にアピールできたことは、女性作家という枠組みを遙かに超えて多くの人たちに記憶されている。

参考文献

- 『田村俊子作品集』第1巻／第3巻オリジン出版センター一九八七年
井上俊・上野千鶴子・大澤真幸・見田宗介・吉見俊哉編『ジェンダーの社会学』岩波書店一九九五年

河合隼雄『河合隼雄著作集10 日本社会とジェンダー』岩波書店一九九四年
 伊藤公雄・牟田和恵編『ジェンダーで学ぶ社会学』世界思想社二〇一五年
 水木光美『ジェンダーから見た日本語教科書』大学教育出版二〇一五年
 中村桃子『女ことばと日本語』岩波新書二〇一二年
 中村桃子編『ジェンダーで学ぶ言語学』世界思想社二〇一〇年
 ジョン・R・サール、山田友幸監訳『表現と意味』誠信書房二〇〇六年
 J・R・サール、坂本百大・土屋俊訳『言語行為』勁草書房一九八六年
 J・L・オースティン、坂本百大訳『言語と行為』大修館書店一九七八年
 S・フェルマン、立川健二訳『語る身体のスキャンダル』勁草書房一九九一年
 小林康夫・石光康夫編『文學の言語行為論』未来社一九九七年

註

1 イブセン（一八二八〜一九〇六）はノルウェーの劇作家で、薬局の見習い
 をしながら戯曲を書いた。その後、ベルゲンの劇場の座付き作家となり、
 自作上演の機会を得た。ノルウェーの民話を題材とした喜劇『ペール・ギ
 ユント』（一八六七）で人気を博した。さらに社会劇『人形の家』（一八七九）
 『幽霊』（一八八二）など、社会問題を追求した作品を発表し、欧米諸国で
 評価された。また『野鴨』（一八八四）『ヘッダ・カブラー』（一八九〇）
 などのすぐれた性格劇も書いた。イブセンの名は、一八八九年森鷗外によ
 って最初日本に伝えられた。最初イブセンをゾラのような自然主義文学者
 と捉えて嫌っていたが、『ブランド』（一八六六）と『ジョン・ガブリエ
 ル・ボルクマン』（一八九六）を翻訳した段階でイブセンの思想を吸収し、
 『幽霊』『人形の家』（鷗外訳「ノラ」）を翻訳する過程でイブセンを評価す
 るようになった。一九〇六年イブセンが亡くなってイブセン熱が再燃し、
 翌一九〇七年には主として自然主義の作家、評論家たちが中心になって、
 柳田国男、岩野泡鳴らが「イブセン会」を発足、その新しい思想が議論さ
 れ、高山樗牛、田山花袋、島崎藤村、夏目漱石など多くの文学者がイブセ
 ンを読んだ。

2 黒澤亜里子「改題」『田村俊子全集第3巻』ゆまに書房二〇一二年三七〇頁。
 3 長谷川啓「『田村俊子』編解説」『作家の自伝87 田村俊子』日本図書セ
 ンター一九九九年、二六一〜二六二頁。

4 森田草平「新らしき女としての女史」「月報1」『田村俊子作品集』オリジ
 ン出版センター一九八七年六頁。

5 徳田秋聲「人として又藝術家として」「月報1」『田村俊子作品集』同掲同頁。
 6 駒尺喜美「月報1」同掲書二頁。

7 小平麻衣子「女作者」論—テクストに融ける恋する身体『田村俊子』ひ
 つじ書房二〇一四年一三〇頁。

8 J・L・オースティン坂本百大訳『言語と行為』大修館書店一九七八年一一頁。
 9 笹川洋子『樋口一葉 物語論・言語行為論・ジェンダー』春風社二〇一三
 年二頁。

10 J・L・オースティン坂本百大訳『言語と行為』大修館書店一九七八年
 一八六頁。

11 飯田祐子「〈女〉の自己表象—田村俊子「女作者」」『彼女たちの文学』名
 古屋大学出版会二〇一六年三六頁。

12 瀬戸内晴美『田村俊子』講談社文芸文庫一九九三年三七三頁。

**A study on the framework of a female writer-
Toshiko Tamura**

Keiko OGIHARA

Course of Principal Human Sciences, Department of Human Development,

Faculty of Humanities,

Kyushu Women's University

1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi, 807-8586, Japan

No English abstract